

じゅうがたび

宇賀なつみ氏

フリーアナウンサー／aestas 合同会社 代表社員

ご両親の影響もあって旅好きに育ったという宇賀なつみさん。コロナ渦で失った旅行の機会を取り戻そうと、この3年間は毎月海外旅行に出掛け 30 カ国以上を訪問したとのこと。人生の節目節目で旅行に助けられ背中を押されてきたという感動エピソードも含め、心底からの旅好きぶりがひしひしと伝わり、旅行業界にとっては大いに勇気づけられるお話をうかがうことができました。

始まりは家族旅行

私は東京生まれの東京育ちですが、子供の頃から毎週末や祝日には必ずどこかへ旅行に出掛け、全国あちらこちらを訪れました。両親がとにかく旅行好き。贅沢な旅行ではなく自治体運営の宿泊施設を利用するなど、工夫しながらいろいろな場所へ連れて行ってくれたので、自然な流れで旅好きになりました。

20 歳の記念に春休みを利用して行ったロサンゼルス・ホームステイの1カ月は衝撃的でした。英語も話せず友人もいない。もちろんスマホなんてない時代に単身ロサンゼルスで暮らした1カ月間は忘れられない体験になりました。最初は体格が大きく強面のアメリカ人を見るだけで緊張し一人でバスに乗るのもおっかなびっくりでしたが、ある時に強面の男性が妊婦さんにサッと席を譲る姿を見て、限られた小さな世界に生きてきた自分の中にあった偏見に気づき反省しました。

それ以降は1人でカフェへ行き隣に座っ



た人と積極的に会話を楽しんだり、お店の店員さんとの会話も楽しめるようになりました。日本にはない価値観を持った人たちと出会い、価値観が揺さぶられる体験をすることで自分も変化し、図太くたくましくなれました。1 カ月だけの体験でしたが私の感覚では、「食べるものがあって寝る

所さえあれば、もうどこでも生きていける」くらいの感じになりました。

人生変えた鬼怒川プチ温泉旅

就活ではマスコミ志望でした。マスコミの中でもテレビ局の採用活動は早く始まるためテレビ局も、というくらいの発想で日本テレビを受け最終面接まで進みましたが落ちました。度胸試しのつもりでしたが、いざ落ちるとショックでした。テレビ局の件は親にも友人にも伝えてなかったのですが大学の親友が敏感に私の変化を察知し「どうかしたの？」と声を掛けてくれたのをきっかけに最終面接でテレビ局に落ちたことを明かすと、「これから温泉へ行こう」と誘ってくれました。キャンパスから直接、東武線に乗って鬼怒川温泉へ行き素泊まりできる宿を探し、コンビニでお酒とつまみを買って1泊。翌日は観光してリフレッシュしました。

このプチ温泉旅行で気持ちを切り替え、アナウンサーになりたい自分の気持ちを確認できたおかげで、その後に受けたテレビ朝日の採用試験に合格できたと感じています。旅行の費用は1万円もかからなかったと記憶しています。それで自分を包み込む空気感や流れをいい方向に変えてくれる力が旅行にはあったのだと思います。

卒業旅行で知ったライフ・イズ・ビューティフル

大学の卒業旅行は2008年の11月に1人でオーストラリアへ行きました。シドニーの街じゅうを歩き回りフェリーで渡った

島で、散歩の途中に海辺の見晴らしの良い場所で休憩しました。南半球の初夏の気持ち良さと景観の素晴らしさに感動したことに加え、4月からはアナウンサーとして働くという緊張感が相まって思わず涙がこぼれ泣いてしまいました。するとどこからか警備員の格好をした男性がやってきて早口の英語でまくしたてられました。後で分かったのですが、そこは時に自殺志願者もやってくる場所だったので、1人で泣くアジア人を心配し声を掛けてくれたのでした。その時に言われて強く印象に残っているのが「ライフ・イズ・ビューティフル」というフレーズ。どんなことがあっても人生は素晴らしい。その後の人生でこの言葉に何度助けられたか分かりません。

旅行は時に億劫に感じたり勇気が必要な面もある。ある種の面倒くささも付き物です。でも人生の流れを変え自分の可能性を広げてくれる旅行の価値は他に代えがたいものです。

退社を決意したベトナム旅行

テレビ朝日では「報道ステーション」でお天気キャスターやスポーツキャスターを計5年間務め、その後も朝番組の「グッド！モーニング」や「羽鳥慎一モーニングショー」などを担当し、忙しくもやりがいのある仕事を任され走り続けました。そして入社10年目の夏休みにベトナムへ行きました。ヨーロッパやアメリカへ行くことが多かったのですが、この年はふと思い立ってベトナムを選びました。

ベトナム独特のゆるい空気感や、暑く湿度を感じる気候に身を任せているうちに

「10 年間、自分なりに頑張ったな」「これから私はどうしようか」「そろそろ人生を変えてみようかな」という思いが湧いてきました。それまでも会社を辞めることを全く考えなかったわけではありませんが、真剣に辞めようとは思いませんでした。それが、その時は「会社を辞める」という選択が自分の中ですんなり腹落ちしたのです。テレビ朝日を辞める決意を固めた 2018 年のベトナム旅行も人生にとっての大きな旅となりました。

旅には人生に欠かせない余白がある

フリーランスとして独立後は、スケジュールを自分で管理して自分で休みを決められることを優先し、事務所にも属さずマネージャーも運転手もいないたった 1 人の体制で仕事をすることにしました。これで旅行にも行きやすくなると喜んだのもつかの間、コロナ禍で不要不急の外出ができなくなり、海外旅行も不可能になりました。せっかくフリーランスになったのに、旅好きの私にとって本当に辛い時期でした。

ようやくコロナ禍が明けてからは、毎月海外旅行することを決めて 2026 年までの 3 年間で過ごしてきました。3 週間働いて 1 週間は休み旅行に出掛けることを目標に、3 つのレギュラー番組と両立するスケジュールを工夫して約 30 カ国を旅しました。美容院に行くのと同じくらいの頻度で旅行できる喜びで体調も良くなり、世界中に友人が増え、知らない言語を覚え、生きたいように生きられる人生に近づけている感覚を持てるようになりました。

旅先で自分の常識が覆され価値観に刺

激を受け、それまでの自分がいかに狭い世界しか知らなかったかを思い知らされ、それをもったいなく感じます。それと同時に、たとえば「夜暗くなったら寝る」「朝起きたら朝食を取る」「大切な人がいる」「子供は可愛い」といった世界共通のどこでも変わらない事実を知れば、価値観の違いを乗り越えて人に対して優しくなれることも知りました。

また旅先では年齢や肩書や国籍を気にせず 1 人の人間として接してくれる人々がいて、自分自身を気持ちよく解放でき、自分が本当は何をしたいのか心の声を聞くことができます。それは旅が、人間に必要な「人生の余白」となる時間を与えてくれるからです。

気がかりなのは若い人たちの海外旅行への関心が薄れていることです。先日、海外旅行経験がない 20 代前半の AD さんに理由を聞くと「だって日本が一番良い国だと分かっているから」との答えでした。でもスマホやネット、SNS で知る世界と実際に行って五感で感じる世界はまったくの別物です。確かに円安で世界情勢も不安定な現在は海外旅行に出掛けづらいのは理解できますが、それでもエイッと 1 回飛び出してほしいと強く思います。そのため私は旅の価値や魅力をこれからも発信し続けていきたいと考えています。

<Profile>

うが・なつみ●2009 年立教大学卒業後、テレビ朝日入社し「報道ステーション」等を担当。2019 年に退社しフリーランスに。現在はテレビ朝日系「池上彰のニュースそうだったのか!!」等テレビ、ラジオで幅広く活動。著書に『じゅうがたび』（幻冬舎）など